■（５５）新聞に欠かせない季節の節目

被災地の仮設住宅は冬支度真っ盛り。被災者にとって、雪が積もったがれきの間を親族を捜し回り、灯油不足で極寒の避難所で震えた記憶は忘れられない。支援で配られたストーブやこたつを狭い部屋に設置して備えている。まもなく初雪の便りが届く。

この季節の変わり目を伝えるのも新聞の大切な役割だ。「今年も木枯らしが吹いた」「祭りの季節が来た」と書く。ある人はそれで「いつも通り季節が巡っている」と安心感を覚えるかも知れない。「今年の冬は違う」など特別な受け止めをする人もいる。

その変化を見つけるのも記者次第。２０数年前の新人記者時代、上司に言われて、草花と鳥の図鑑を買いそろえた。道端に咲いた花は何。飛んできた渡り鳥は？写真を撮っては図鑑で調べ、短い季節記事を狙っていた。当時は日の出や日の入り、海の満潮・干潮の時刻も調べて原稿に書いていたので、気象と生物は必修科目のようだった。

仮設住宅の生活は原則２年。ただ、誰もそれで終わるとは思っていない。冬を何回越せばいいのか。被災地は冬、春、夏、秋と過ぎた。大き過ぎる節目が何度も訪れる（山）